

ぐ気がついた。聞けば、父は昭和二十二年四月に故人となっていた。兄（勲四等 故松尾源三）もソ連に抑留中未帰還。留守を守ってくれた母と弟に囲まれて家族団らんを味わった。

#### シベリア墓参

平成七（一九九五）年度シベリア墓参団に参加し、五十年目にしてシベリア墓参を果たすことができた。

慰霊バス 夏のシベリア ほこりたて

五十年 思い語りぬ 夏の旅

蚊をはらい 墓碑ぼひを建てつつ 戦友とも祈る

#### 【執筆者の紹介】

全国強制抑留者協会より平成十二年度労苦調査依頼があったので、氷上町支部長芦田史朗氏に依頼した。

芦田史朗氏は、兵庫県戦争体験語りべ名簿に登録されている。地元の中学校の反戦集会等で活躍している。また、兵庫県が設立した「平和の礎」の境内の清掃を続けている。

十一年度には、全抑協兵庫県連合同慰霊祭を地

元、氷上町公民館大会議室で実施した。地元、氷上町支部長として協力を惜しまなかった。また、舞鶴引き揚げ公園へ見学旅を実施し、多数の会員が参加した。

（兵庫県 上月 光男）

### 第三部 抑留編

和歌山県 辻本 信二

はじめに

昭和十五（一九四〇）年三月、県立粉河中学校を卒業した私は、果てしなき希望を抱いて雄飛した第二の故里北満の地に、また軍隊生活と社会主義の国ソ連に抑留された十分の一世紀にわたる、身をもって体験した過ぎ来し方の回顧を、その順を追って思い出すままに雑然とこの小冊子、第一部 満蒙編、第二部 軍隊編、第三部 抑留編にまとめたものだが、文筆にはもちろん言葉の足りないところの方が多く、自信とてかけられないが、ありのままを実録としてとにかく残し

ておかなければ気が済まなくてペンをとった次第である。少しでも興味を感じられれば光栄です。

## 敗戦

療養の温泉行が急転逃避行となった。私達が牡丹江から乗った列車は軍人軍属ばかりでハルビンに到着した。ここで満員列車になお乗り込んで来た兵士達がいた。北支から来たのだが、その行く場所を失ったため逆戻りするのだという。統率のとれていないのがよく分かった。夜八時半頃、飲まず食わずで新京（長春）駅に着いた。その日、山田関東軍司令官は「余は新京に在り、前線の将兵は最後の一兵に至るまで抗戦に従事せよ」と全軍に布告した。

だが賽は投げられて逆目が出た。言わば障害者ばかりの私達はこの先々いかにすればよいか憲兵に尋ねたが、分らないと言う。そこで陸軍病院に連絡した。しばらくして迎えのトラックが来て新京第二陸軍病院に着いた。軍医や看護婦が右往左往している。全然統制がとれていないようだ。敗れるときつてこんなものだろうか。私達は邪魔者扱いにされ一室に放り込まれ

た。間もなく空襲が始まり防空壕に避難するようにと看護婦が必死で誘導に来たが、どうせ死ぬならどこにいても変わらないからと言ってそこで頑張った。この夜の長かったこと、何回も波状攻撃をかけて来て爆弾を落として行った。

翌日は身の回りの整理だ。作戦要務令やその他書類等は全部焼いてしまった。白衣は敵の目標になりやすいからと軍服に着替えた。看護婦達もカーキ色の軍服、戦闘帽に着替えて勇ましくなった。その日の午後、白城子方面から敵戦車二千台が新京に向かって攻撃して来るといふ情報が入った頃、新京を無防備市に宣言して東辺道の山地（通化）に関東軍の首脳だけが移動して行ったが、新京にいる人々は一日じゅう敵の空襲に悩まされていたのだった。

八月十四日、行く先不明だがとにかく病院全部が移動することになった。両足を切断した兵士や重病患者でどうしても一人では動けない者は、かわいそうに軍医の手によって安らかに眠らされたのである。敵になぶり殺されるよりも皇軍の名誉のために彼等は従容と

して死に赴いたのであった。ああ何たる悲惨事、その家族達のことを思えばなお一層哀れを誘うのだった。

自分の命だけはどうしても持つて帰らねばと、我と我が身に決心したのであった。

病院から新京駅に到着したのはもう夜も暗く、暗闇の中で黙々とうごめくものは皆戦友だった。風になびく柳のごとく烏合の衆が、魂のない戦列が右に左に揺れながら歩いて行くのであった。どこへ……。それはだれにも分かっていないのだ。

#### 無条件降伏

駅周辺は憲兵の物々しい警戒網が敷かれていた。部隊は駅前の路上で動かなくなった。偵察に行った一人が「皇族方の移動らしい、どうせ我々は後回しになるのだ」と言っているうちに、満州皇帝初め皇族方がまるで追われる者のように落着きのない足取りで居並ぶ兵士の中に消えて行った。北支方面にでも逃れるのだろうか」と話し合ったものだった。

ようやくにして貨車に乗せてくれ、部隊は一路南下した。

翌十五日通化に到着。その地の女学校に収容されたが、ここには既に関東軍の兵士が校舎や庭に満ち溢れていた。その日、天皇陛下の重大放送があった。関東軍が崩壊し、ついに日本は敗れたのである。我々一兵士に至るまでただ滂沱と流れる悲憤の涙を拭きもやらなかったのである。その夜、自決将校も出て皆の心が動揺した。部隊長は「各自その分を守り、規律ある統率の下に行動しよう」と訓示があったが、望を失い脱けがら同然の私達は、次に来るべきものを想像して一日も早く内地へ帰りたいと話し合った。

#### 三十八度線の明暗

通化を出発したのは十八日、南下する貨車に詰め込まれて四日間、乾パンとイワシの缶詰ばかりの生活が続き、二十二日、朝鮮平壤（ピョンヤン）駅に到着した。この間、食事ごとに小さな駅の引込線に入る私達の貨車を目がけ石を投げつけてくる朝鮮人達が、陣太鼓まがいの国旗を打ち振っていた。

危険だから下車は必要少数にとどめ、暗い貨車の中で食事を持つこと幾度か。朝鮮民族は日本のおかげで

大東亜戦争にも最少の被害で済んで来たではないか、それにこうした迫害を加えてこようとは言語道断である。私達はこの怒りを歯を食いしばって辛抱しなければならなかったのである。

私達の列車はここで停車したきり動かなくなった。後続の列車がどんどん南下するのを心なくただ見送るだけだった。なぜここで動かなくなったのだろうか、疑問はすぐに解けた。

梯团长の資格であった。将官級を乗せた列車は病院長の長が指揮する列車を尻目に京城（ソウル）方面へと南下し、ソ連の捕虜となるのを免れているのである。明らかに階級差別と言えよう。ここで三十八度線をはさんで明暗はつきりと処を異にしたのだった。

私達は、平壤一中に関東臨時兵站病院を急造、そこに収容されたのだった。

## 捕虜

八月二十六日未明、キーンと金属性の音をさせてソ連の戦闘機がどんどん平壤の飛行場に降り立ち、しばらくして私達はソ連兵のために武装解除させられたの

だった。戦記映画で武器を捨て、両手を挙げながら降参している姿をよく見たものだが、こんな姿を私自身がここで経験しようとは思わなかった。銃剣、日本刀、拳銃等が山のように積まれていったが、いつの間にかどこかへ運び去られてしまった。皆丸腰となり、どこか頼りない。しかし、鉄柵が張られていないのでまだ捕虜という実感が薄い。

三十度を超す熱い日が続いた。身辺の整理と言って小さな針釘に至るまで嚴重に制限された。ここでは無聊の日を送っていたが、九月二日夜、突然ソ連兵が自動小銃を構えてやって来た、移動だ。暗闇の道を前後左右を監視されながら三時間も歩いただろうか、随分長く歩いたようだった。もうその頃、足の骨折もほとんどよくなっていたが、いささか疲れを感じていた。

そこで三合里という捕虜収容所に収容されたのだった。ここは完全に鉄条網が張りめぐらされていた。私達約一千人は二十九大隊と名付けられ、約三万人の先客（日本人捕虜）の仲間入りをすることになった。いよいよ本格的な捕虜となった。この先客は自分達の入

る収容所を自分達の手で作ったのだと苦笑していた。輜重隊の兵舎にはもちろん、厩舎まで人々が溢れていた。

盆地を控えて両側は丘になっており、丘のあちらこちらに兵舎や厩舎が建っており、私達は小高い丘の上で天幕を張って過ごすことになった。盆地には大小幾つかの水溜りがあり、腐乱して大きくふくれ上がった馬に真っ黒に蠅と無数のうじ虫が湧いているが、だれも片付けようとする気力もなく、臭気を漂わせていた。

ここでの日課は炊事用の薪取りだ。昼食携行で十人の捕虜に一人の監視兵がついて来る。最初のうちは杉林が近く作業も楽だったが、付近一帯をはげ山にしたがら奥へ奥へと進むので、だんだん遠くなっていくので車両に積んで帰らねばならなくなった。

こうした作業の中で逃亡する者もいたが、朝鮮の保安隊や人民の手によってソ連兵に引き渡されたのであった。彼等は私達同胞をかばってくれるどころか、反対に捜し回っていたようだ。終戦まで忠実だった朝

鮮人や日系露人は早くもソ連進駐軍の手先となって、物置や床下に隠れていた日本人を嗅ぎ出してソ連軍に突き出すのだった。朝鮮人は何の恨みか、日系は父祖の恨みよりも自分達の身の安全を計る方が大切だったのだろうか、実に憤慨に耐えない。引き連れられた兵士は大抵翌日銃殺され、私達が作業に出る途中、丘の彼方で銃殺されているのを見せられた。大きな穴を掘って（この使役も同僚がしたのだ）、そのすぐ前方に目隠しをして後ろ向きに立たされ、こちらには自動小銃を構えた鬼のソ連兵がいるのだ。自動小銃が火を吹くと同時に立たされていく兵士は穴の中に姿を落としたのであった。

この場に臨んだ気持ちはいかばかりか、七度生まれ変わって仇敵を滅ぼす亡霊となって現れよと念じたものだった。ともに口惜しい、その無念やる方もない。警備兵達は、逃亡するとお前達もこんな目になるんだ、よく見ておけと言わんばかりに威張っていた。

#### 捕虜の冬

こうした中で、月に二回位ずつ三千人余が次々とど

こかへ移動して行く。「ダモイ（帰ること）できるんだ、日本へ帰るんだ、日本へ帰るんだ」と言っただけで貨車に乗せられ、喜んで虜舎を後にして行つた。

秋風が吹き野には萩や女郎花が無心に咲いていた。

内地では柿が色づき、深く澄んだ空の下で頭に手拭いを姉様かぶりモンペ姿で忙しく稲刈りしている母や、脱穀機を踏んでいる父の姿が彷彿として湧いて来た。

秋は短く、木枯らしの吹く寒い冬がやって来るとすぐに雪がちらつく。ラーゲル（収容所）は死んだように静かになり、どこともなく寂寥さを感じさせる。

正月がやってきたが何の楽しみもなかった。あるものはただ捕虜という汚名と、重庄の中で今日一日をいかに生きていくかという現実の問題だけであつた。こんな味気ない希望のない新年を迎えたのは恐らく生まれて初めてのことだつたらうか……。

毎日の用を足すために自分達の手で造つた便所は、四方を箆で囲って長い深い穴を掘り、それに松の丸太をちょうど足の置く幅に並べた至って簡単なものである。穴が深いので冷たい風が吹き上げて来る。いつま

でここで生活しなければならぬのだろうか。毎日、「ダワイ ラポーター（早く仕事をせよ）」と急ぎ立てられながら、我々の味方はただ自分一人しかないようであつた。

#### ラーゲル転送

昭和二十一年一月八日、今日は大詔奉戴日だつたなあと話し合っていると、警備兵が「ダモイ東京」と言つて我々を喜ばせた。本当に日本へ帰してくれるのだと、気の早い連中は帰つたらどんなにかおいしいごちそうを食べさせてもらうんだなどと話し合つていた。貨車に乗せられた皆の顔色は生き生きとして来た。だがしばらく走って早くも下車だ。柳亭里と言う小さな駅だつた。少し歩いてまたラーゲルに入れられてしまった。楽しい帰国の夢はここでも無惨に破られてしまつたのである。

ここは北鮮東海岸の咸興港を控えていたので、毎日の使役はほとんど船荷の積込みで沖仲仕の仕事だ。機械類、穀類、衣料品等々全部満州から貨車や船舶で運んで来たものであつた。日本人が営々として築き上げ

た満州のその産業用資材も、日本人の捕虜を使ってこの咸興の港から軍艦でソ連に運び去られたのである。皮肉にもその使役に従事させられるとは……。

約四カ月間このラーゲルでの作業が続いた。埠頭や船中で穀類や豆類の積込みには誰もが希望して行きたかった。昼はその米を失敬して飯盒で煮て食べる事ができるし、また袋や靴下に入れて隠し持って帰るのである。しかし、最初のうちは全然ソ連兵に見付からず調子がよかったのだが、衛門で一人が発見されてからは大っぴらに盗めなくなった。それでも彼等との知恵比べで随分と持ち帰り皆で分け合ったが、終いに身体検査までされるようになったので、昼食後もう一回飯盒炊きをして持ち帰るようになった。炊いたものまではやかましく言われなかったので大いに助かったのであった。

昼食のおかずは、埠頭のコンクリート塀を乗り越えて岩にくっついてしている海藻や貝類をとって生で食べたり雑炊にしたりしてちょっと楽しかったが、生のカキを食べて中毒で三日も四日も下痢が続き苦しんだ。そ

れから今日まで生ガキを食べなくなった。海には油槽船の油や汚物が浮かんでいたが、食べることに寝ることにはしか興味のない日々だったので、どんな物でも口に入れたのが祟ったのだ。

#### 娯楽

重労働の中でもやはり心の慰めがほしかった。皆が工夫してそれぞれ竹で尺八を作ったり、笛、太鼓までこしらえ、種々趣向をこらして演芸会を開いた。何千人かいる中ではその道のベテランもおり、楽団もすぐにはソ連の国歌を合奏して警備兵達の御機嫌をとったので、この時ばかりは明るく笑ったりしていた。

山名という四十歳位の兵士が浪曲をよくした、その十八番は「吉原の百人斬り」で、涙誘う場面やぞっとする場面等が出てきて実に堂に入ったものだった。

我々が感心して手をたたくと彼等には全然解せないで、日本には奇声を発する競争でもあるのかと愚問したりしていた。しかしこの演奏会を初めとして各種の催しによって皆のすさんでいた気持ちが随分とほぐさ

れたことは大いなる収穫であった。

班内では、戸の棧を引き抜いて器用な者が集まって麻雀牌を作った。象牙でないというだけで本物そっくりだった。勝負は隠れながらやっていただけの間に広がまり、雨で作業のない日には交代で手ほどきし教え合ふのだった。自らの楽しみをこんな遊びで満足させていたのも帰国が長引く予感があったのかも知れない。春が来て雁が帰って行っても私達は一向に帰してくれそうにもなかった。

シラミ

胸の辺やふんどしの紐の付近が何だかムズムズするので押さえて見ると、大きなマンドリン（私達はシラミをソ連の警備兵が持つ自動小銃と並んで厄介者だったからこう呼んでいた）がいる。夜となく昼となくこのシラミや蚤に悩まされた。両手の親指の爪でプチンと殺したときの気持ちはちょっと愉快だった。

雌がいつの間にかシャツや毛布の縫目に銀色の卵を生みつけている、三日もすれば快い体温でふ化して無数に這い出てくる。警備兵はこれを嫌った。私達が警

備兵を嫌っている以上に彼等は伝染病が恐いのだ。

在満当時、満人がよく日なたほっこをしながらシラミを潰しているところを見ていたので大して気にもかからないが、最初のうちはお互いに隠していた。人に移るのが早いので、一人が持っているを忽ちにして全員に蔓延する。そこで大きな熱気消毒場を造り作業の合間に毎日交代で各中隊順番に消毒をするのだが、なかなかシラミの種は尽きなかった。それでもラーゲルを交わると減っていった。絶えざるこの強敵を消毒によって滅ぼすことができたのである。

#### 威興港出帆

六月五日、今度は船に乗るんだというので「ダモイ東京」間違いないと帰れると皆で疑わなかった。朝から準備で大ハリキリだ。午後嚴重な所持品検査があつて、五〇〇〇トン級の軍艦に乗せられた。暗くなつて出帆。艦首を南向きに進めているというので安心して船室で休んでいたが、夜半、昔内海航路の機関長をしていたという愛媛県出身の沖田さんが星空を眺め、船は北北東に向かっているという。一瞬静かになった。



皆覚悟はできてるが、またしても一杯食わされてしまったのだ。

一九〇〇（明治三十三年）年、奉天に起こった義和団事件のとき、ロシアに居住していた中国人を黒河まで護送してやると偽り、ブラゴエシチェンスクに集め約六千人一人残らず虐殺したというから、我々もそのようにされるだろうとか、日露戦争では、日本軍が逆に露軍の俘虜を敵艦に乗せ東シナ海で艦艇もろとも撃沈させたというから我々ももうすぐ海の藻屑だ、魚の餌食になるんだとか、いろんな憶測やら悲観やらが飛び出してきて一層憂鬱になってきた。

こうした中で利己主義が頭をもたげてきた。自分さえよければ他はどうなってもよいのだ。私はもう運を天に任せどうにかして身体一つを持って帰ればいいんだと心に言い聞かせ、幾分か余裕が出て来たように思えた。六月七日夜半には、船はもうソ連領ポシェットの港に外泊していた。翌八日、外国で見る朝日が無情に私達を照らしていた。

#### 女医と身体検査

いよいよソ連領だ。まさに刑場にひかれて行く牛のごとく、それこそろのろとタラップを降りた。そこはもうシベリアの大草原であつた。感慨何ものもない。私達の仲間（関東軍）が無慮数万（約十万人と言われていた）、花を散りばめたようにきれいに張られたテントに収容された。見遙かす草原の彼方には満州領白頭山系の長鼓峰が霞んでいた。六月のここはもう真夏に近かった。

早速身体検査が始まった。軍帽に長靴姿のよく似合う男勝りのような女医が多かった。まず最初は背中に太い大きな注射が打たれた。この注射は何であつたかはいまだ誰にもその正体は謎であつた。丈夫な者で一日、ちょっと弱い者は二日も三日も熱を出して休んだ。誰言うとなくこの注射は去勢のためだと。昔から牛馬も去勢すればおとなしくなり子孫を増やすことができない。我々もいよいよ牛馬並みで終わらなければならぬんだとか、子供ができないからソ連の女医達喜んで可愛がってくれるんだとか、それにはちょっと我々のは大海に牛蒡だとか、取沙汰もここまで来

るとユーモラスだ。しかしこれは杞憂に終わったらしい、私も二人の子供の父となっているのだ。

翌日は、頭髮と腋毛と陰毛の散髪だった。毛という毛は全部刈り取ってくれるのだ。頭の方は慣れたもので気持ちがいい。腋毛や陰毛はいささか照れくさい。一段高い台の上に全裸で立つとそこはもう慣れた手つきで刈り出すのだが、勇敢なる女医達は交代で見物にやってくるは何やら笑いながらしゃべっている。陰毛は刈られて二、三日もすると、その生え始めてチクチクして何だか気持ちが悪い。

この検査で最も喜んだのは女医達だった。我々の持ち物はソ連兵に比べて大変可愛らしかったので、よいおもちゃになった。彼等のはまた特に大きく、その形容も握り拳を腕ごと肘から曲げて振って見せるのである。実に偉大なものだ。

#### 逃亡兵

一面に生い茂ったススキが原の彼方は満州領である。夜陰に乗じて毎日のように逃亡する者が出た。ソ連機の低空搜索飛行と逃亡兵の所持品から軍用犬を利

用してその行方を追及し、大抵は捕らえられて帰って来たが、銃殺されたかどうかは分からない。何もかもこの国は秘密主義なのだろうか。しかし、捕まった者達がトラックから降ろされるときに身体を紐で身動きできないように縛られ銃台や長靴で蹴落とされていたところを見ると、あまりよい待遇は受けていなかったろうと想像できる。

我々は退屈な日々を送っていた。毎日貨車が到着して同僚の何千人かを北へ運んで行った。いつかは自分にもその日が来るに違いない、間違っても日本へは帰してくれるようなことはないだろう。

#### 移送貨車にて

六月二十日、貨車二十数両に乗せられたときには愕然とした。二段に仕切られた穴倉のように暗い中へ五十人ずつ押し込められたのだ。夜も昼もなく真っ暗な貨車の中にすし詰めにはさまれた。貨車が走り出すと床板を小さくくり抜いた簡単な便所からシベリアの大地へ脱糞するのであった。この穴から微かに明らからしきものが入るのだった。

貨車はそれぞれの思いを乗せてウスリー江に沿って北上する。食事の時間以外は停車しない。大抵は大草原の中の小さな駅の引込線に入る。このときだけが大気に接する唯一のチャンスである。炊事当番だけ降りることができて、他の者の下車は禁じられている。しかし車内に下痢患者が出たため、特別、車外に脱糞を許してもらった。それはそれは見事なもので、貨車が停まると一斉に蜘蛛の子を散らしたように飛び降り、あたかも落下傘が舞い降りたようにお尻を出して放列を敷くのだった。ソ連の青空の下で気持ちよく用を足すことができたのであった。初めは貨車内の小さな穴の場所ではちょっと隣の者に気の毒で、用を足そうとするのだがなかなか出てこないもので、まして後から急ぎ立てられるとなお出なくなるもので、皆でできるだけ辛抱を合ったのでした。夜になると扉の外から錠が掛けられ、貨車の中は死んだようになってしまうのだ。陰気が暗闇の中に充満してくる。

#### 車中での感慨

貨車がハバロフスクで停まると、よく太った女が

真っ黒になって検車や注油したりして働いていた。内地ではちょっと想像もつかない。

同胞が近くの貨車へ石炭や材木の積込み作業をしていたが、離れていて声をかけることもできず、手を挙げて無事を祈るだけだった。今にこの人々と同じ運命を背負うことになるであろうと心淋しく眺めやった。

ここから列車は方角を西に向けた。子供の頃読んだ探偵小説に、目隠しされ腕を縛られたスパイが貨車の隅に転がされ、どこともなく連れ去られるとき、レールの長さを数え（レールの継ぎ目の音で計算し）鉄橋を渡ったかをその音と勘で、もう何キロ走っているからどの方向まで連れて来られたかを大体判断したという。私はこの話を思い出しちょっと始めてみたが、ものの百までも数えないうちにばからしくなってやめてしまった。ここは内地の鉄道とは違うのだ。所詮、行くところまで行かねば仕方がないのだ。

それから一週間も走ったであろうか、チタに停車した。息詰まっている車内の空気を和らげようと二、三人の頑強者がドアの錠を、誰が用意したのか鉄棒でこ

じ開けた。これで外の空気が吸える。景色が、窓外の様子が見えるのだが、あまり広く開けて警備兵に見付かつてはせっかくの苦勞も水の泡だ。そこで交代で細かい明かりの差してくる隙間から眺めては外の様子を知らせ合つたのだった。

イルクーツクに到着するまでの五、六時間はバイカルの湖畔を気持ちよく走っていた。真つ赤な曼珠沙華が何を物語るか咲き乱れていた。この湖は三三〇〇平方キロ、日本の九州と大体同じ大きさだ。全長八五〇キロもあり、細長く南北に延びている。貨車はこの湖の南岸を走るのであまり長くはないが、それでも三、四時間は湖岸に沿って走つたろうか。須磨明石の海岸を走っているような錯覚に誘われて一同元氣を取り戻したようだった。

ここから約二五〇〇キロも走るとノボンビルスクの町に着く。ポシエツト港を出てから約二週間であつた。ここで一時貨車を空にして公営浴場で身体を洗うことになった。この浴場は何百人でも一緒に入れるという大きなもので、全部シャワーだ。二週間ぶりの垢

を落として爽やかな気持ちでちょっと町に出てみた、割合に静かだ。あまりぶらぶらしている者も見当たらなかった。ここノボンビルスクから西へ首都モスクワまで四〇〇〇キロ、南へタシケントまで三二〇〇キロで、ここがちょうどその分岐点である。

私は首都モスクワに行つて見たかつた。貨車が西に向かつてくれることを願っていたが無情にうっちゃられた。捕虜の分際で何を贅沢な……と神の声。南下した貨車は一週間でタシケントに到着した。ここが我々の目的の地か。途中、聞いたことのある駅名がアルマータであつた。この付近は高原地帯で、恐らくは天山、アルタイ山脈ではなからうか。リンゴがたくさん収穫できるらしく、キルギス族がバケツにいっぱい入れて売りに来たが、この国の貨幣を持ち合わせていないので木綿のハンカチーフ一枚と交換したりして、車内一同でこの青いリングに舌鼓を打った。終戦後初めて果物の味をおいしく味わつたのでした。遙けくも来にけるかな、ポシエツト港を出発してタシケントのここ、グリーンチマザールのラーゲル（収容所）まで一万

キロの行程を二十日間でやって来たのだ。長い長い旅程であった。ここはもう中央アジアである。ラーゲルはタシケントの南方約十キロの砂漠の中に建てられてあり、元来ドイツ人（ゲルマン民族）捕虜を収容するためだったが、つい先日どこかへ移動させられて、私達が代わって居座ることになったという。

ラポータ（仕事あるいは労働）

ここでの毎日は土れんが造りであった。約千人の同胞がノルマ（仕事の基準量）のために苦しめられた所である。内地では考えられない土で造るれんがだ。前日に水を入れておいた土を練って箱枠に入れ、整地して砂を敷き詰めた上に遙か前方から順にひっくり返して乾燥するのだが、一日三〇〇枚がノルマだ。これを達成するには一五〇回往復しなければならぬし、翌日のために約三時間、土を掘り水を入れて準備をしておかなくてはならない。掘ってゆくうちにだんだん穴が深くなる。地上へ出るだけでも大変な労力を要するがノルマは一向に変わらない。こうした毎日を続け、釈放の日を待ち焦がれながら重労働に生身をすり減ら

され、同胞の多くは栄養失調で姿を消していったのであった。

#### 作業雑感

毎日の衛門の出入りがまた大変だ。将校も兵士も一生懸命我々の数を数えるのだが、これがなかなか勘定が合わないらしい。初めは日本式で四列縦隊に並べせたが、何回も、また何人もが寄っても満足に数えられなかったので、五列に並べてみたがまだどうにもうまくいかなかったのか、ついに十列縦隊だ。これでやっと数えられたのだろう、それからはいつも十列になって出入りしたものだ。我々は満足にも数えられないような将校や兵士のいることに啞然とすると同時に、こんな国に負けたのかと思う口惜しさよりもばからしく、だが敵たる敗戦の事実と捕虜には変わりないのである。

作業場への往復は警戒が特に厳重である。ラーゲルの西南の小高い丘には天然ガスが吹き出て昼夜の別なく赤い炎が昇っている、もったいないことだ。そこでラーゲルまでパイプを引いて燃料とした。炊事場に、

風呂場に、忽ちにして能率の上がること。燃料は確保されたが、相変わらず火打ち石で煙草に火をつけていた。

油田が近くにあるのだろうか、太いパイプが無数砂漠の中を果てしなく走っていた。

砂漠地帯特有の刺のある草花が咲き、ハッカの木が見事に茂って芳香をあたり一面にまき散らしていた。

粟粥とパン食（黒パン）で栄養が取れないので雑草を煮て食べたが、きつい下痢でやめてしまった。配給のマホルカ（茎の方が多く入った刻み煙草）が一番の楽しみであった。作業に出では下着やタオル等と交換して煙にしまった。

### 食意地

栄養補給をしないと毎日の重労働に耐えられない。作業に出では野ネズミを取って食べるのが楽しみだ。

乾いた土を掘ってゆくと、何を食べているのかよく太って猫位もある野ネズミが穴に住んでいる。この穴を見つけるとそれこそ袋のネズミだ。二人で協力して片方の穴から水を入れ、もう一方の穴ではシャツを袋

に待っていると飛び込んで来るといわけだ。早速皮を剥いで料理する。両足の大腿部は、ちょっとした鶏位の肉があつて実においしいものだ。

夜、暗くなって雑犬が入り込んで来ると忽ちにして我々の餌になつてしまふ。殺してすぐ飯盒で煮るが、肉はゴムのように硬い。だが何でも腹に入りさえすれば満足できるので、手当たり次第に捕つては食べた。蛇も我々に見つかつてはひとたまりもないのである。

作業を終えてラーゲルに帰つて来ると、誰もが我慢の食べ物や名物の話等して味覚と満腹の妄想を追い求め、空腹の虫をごまかそうとしたのだった。

七月の午後の気温は四十五度と言われ、熱砂の舞う砂漠地帯で約九カ月、この夏も無事に過ぎ、また秋も過ぎてそぞろ郷愁の念が湧いてきつた頃、冬が、寒い冬がやって来た。零下十五度、雪はバミール高原から吹きおろしてくる。三月にはもう草の新芽が青々としてくるのだ。毎日毎日ただ変わらないのはパンと粟のスープばかりである。そうした中でまた「ダモイ東京」と言つて、私達一千人が貨車に乗せられた

が、もう誰も喜びもしないし、だまされもしなかった。うそで固められた彼等の言葉には何の信が置けよう。果たしてその凶星が当たって、約半日で貨車から降ろされたのだった。

ウズベック共和国タシケント地区 二八八管下ベカバード収容所

次に収容されたラーゲルの名前だ。第一と第二ラーゲルが向かい合って約三千人が収容されていた。ここで初めて故郷への通信を許されて二回出したが、故里より返信は一度もなかった。(昭和二十三年五月十七日父から舞鶴市ソ連引揚援護局宛の封書を末尾に綴じて保存)

ラーゲルでは全て階級制なく民主的に運営することになった。今まで部下をいじめた将校達は人衆の前で堂々と批判され、階級章もはがされ一兵卒と同じようになった。私も同様だ。あたかも民衆裁判をしているように、そしてラーゲル全体が社会主義化しつつあった。私もこの大きな目に見えない波に乗らざるを得なかった。いや、むしろ進んで乗って行ったのかも知れ

ない。それは早く一刻も早く故里の土を踏みたい一念にはかならなかったのである。

蟻のごとく

このラーゲルのほとんどが東京、名古屋方面の人達で、私達が混成して一層賑やかになった。まず最初の作業は、中央アジアの塩湖アラル海(面積約二〇〇〇平方キロ 北海道位の大きさ)に注ぐその源をパミール高原におくアム川とシル川が、延々二〇〇〇キロの流れを千古の歴史とともに悠々と流れている。その合流点の近くの山(丘と言う方が当たっているかも知れない)を函型に掘割様の底辺約百メートル、傾斜は約四十五度の川を造るのである。

莫大な土の量である。その土を初めの頃は円び(シャベル)で横に捨てることができるが、深くなるにしたがって作業も簡単に捗らない。麻袋にいっぱい(約六〇キロ)を担いで石垣を這い登る蟻のごとく、足に鎖こそないがその昔映画や絵で見た奴隷そのままの姿である。岩が出てくると二、三メートルの空穴を二人で二日がかりで掘るのがノルマだ。ダイナマ

イトで爆破させるがなかなか思うようにはいかない。彼等の「ダワイ ヴィストロ ダワイ（早くやれ）」

の声に追い回されながら来る日も来る日も、来る月も来る月も麻袋にいつばいの土を担いで坂道を登る。自然と皆が歩いているうちに道ができてくる。ノルマを果たさなければパンがもらえないのだ。自然に食事と睡眠と帰りたいことだけに思いが寄せられている日々の中で、他人のパンを失敬して皆に袋叩きにされる哀れな者も出てくる。しかし笑えない事実だ。

身体を酷使するため衰弱が目立ってくる。ただ気力だけで何とか持ちこたえているのだ。休憩の聲がかかると欲も得もなくその場に寝ころんでしまう。生きていることを確かめ合いながら。

この土運搬も、二人がスコップで麻袋に土を入れ、待っている一人（担ぎ役）に両方から肩へ押し上げてやる作業も、朝のうちしばらくは元気に持ち上がった後も午後になるともう力が出なくなるが、この仕事をやり遂げることがあてもなく待ち続けている帰国への第一歩だと、皆力を合わせ怠けるわけにもいかなかった

のだ。

#### 青年突撃隊

夜間、突貫工事を行うため青年突撃隊が編成され、私達若い者は編入された。日中は、暑さのため作業はほとんど夕方から翌朝にかけてだ。ノルマばかり喧しく言っても、一袋ずつの土では実にはまだるっこいものであったので、トラックが入ることになった。

この突撃隊なるものの考案者は、共産主義の学校から帰ってきたという桜井隊長だった。彼等がうまくソ連の上層部に取り入るための策で、その犠牲者が私達であった。この夜間突貫工事によって見る見るうちにその川の様相を変えていった。ノルマは三〇〇%と驚異的でありソ連の責任者を大いに喜ばせたが、身体の酷使は覆うべくもなく衰弱のために次々に倒れていったが、その果たした役割は大きく評価されたのであった。

#### 休日雑感

毎日曜日は一日休養できるのである。洗濯をしたり寝転んだり、故里の思い出を話し合っては楽しい一時



を過ごした。やはり休みは嬉しかった。捕虜の身は、釈放の日を待ち焦がれながら重労働に生身をすり減らされて、その多くは栄養失調で死んでいったことを思い出しては、お互いにどうしても内地の土を踏むまでは生き抜かねば、生きて故里へ帰ろうとすさんだ気持ちを励まし合ったのである。

私は、ラーゲル内の壁新聞（思想改造の絵、文章、娯楽、文芸、趣味等を発表するため壁に貼った）に、いくつかの詩を思い出して書いてみた。せめてもの無聊に。

「ここへくる汽車の窓に

真赤な花が咲いていた

曼珠沙華であった

花が咲いてから葉が出るのだろう」

この詩の中で赤という字が入っており、挿絵に赤色を使ってくれたので彼等のお気に入ったのだろうか。これをきっかけに、アクチーブ（煽動者）に推されてしまった。この仕事も大変だったが何だか張り合いが出て、生きていく希望も出てきたようだ。この緊

張が無事に内地へ帰してくれたのではないだろうか。

夕食後、寝静まった午前一時二時頃まで、永谷画伯（九州男児で挿画をよくした）と一緒に毎夜のごとく壁新聞を、その構想を練ったりしながら製作した。

あるとき、この壁新聞がコンクールに優勝して、ナチャーニック（収容所長）に直々、賞品の煙草をもらったりした。

南にパミール高原が、紺碧の空に夏でも雪を頂いた雄姿を聳えさせている。ここ中央アジアの南部に私は今いるのだ。もうそこを越えるとアフガニスタン、インドである。

満州へ渡ったときには、もうこれ以上遠くへ行くこととはないであろうと思っていたのに、実に遙けくも来たものだ。ここの星を仰ぎ、北斗の輝きを私は寝ながらにして眺めたのだった。

それは、このラーゲルは寝台（と言っても板を並べ藁布団を敷いたもの）と柱、アシの葉で葺いた屋根で、その四方から南京虫が湧いて来て疲れてやせた身体から少ない血を吸いに来るのである。敵はここにも

いたのだ。

日曜日には、南京虫退治が日課になった。暑い上にこの虫の攻撃にあつた私達は、戸外へ毛布を持ち出し芋虫のように丸くなって寝たのであつた。毎夜青天井で、北斗の星がいつしか見えなくなると頭から夜露をかぶってしまうが、南京虫に責められるよりは幾分かよかつた。

#### 左官屋の巻

住宅の建設が始まり、左官屋が不足したので、全然経験のない私とその仲間に入れてもらつた。今までのつらい作業とも同僚とも別れて別の班編成になつたが、聞いてみると作業は何をやっても楽なことはないようだ。

先輩から教わつてセメントを練り、れんがを積むのも見よう見まねだ。初めはノルマも割合に楽な感じであつた。積み終わるとモルタルを塗り、石灰で白く仕上げをする。ペーチカもれんがで積み方を覚えることができた。長く満州にいて石炭をくべるだけのペーチカであつたが、この暑い地方で造ることにならうとは

……。

建物も大体骨格ができて上がると天井塗りに苦労したのである。天井は葦で葺いてあるので土を付ければ動いたため、一尺塗つてはバツタリと落ちてしまうが辛抱して練り返し練り返し、身体中を泥まみれにして漸くにして塗れた時の喜び。ところが翌朝行つてみると、無惨にも半分位地図をかいたように落ちていてはないか。こうした経験を積んで、窓枠に定規をあててモルタルを塗ることも覚えた。

ソ連の塗り鍍こては日本の五倍も大きい。この上にいっぱいのモルタルを乗せ両手で押さえつけるようにして塗るのだが、力の関係か、重くてうまくいかない。小さな普通の鍍ではノルマの三分の一位にしか達しないが、仕事の丁寧さを幾分か買ってくれたため、ノルマに関係なくいつも一〇〇%にしてくれた。

こうしてできあがつた建物には、現場監督やその奥さん子供達までが引つ越して来た。彼等は白パンにミルクを飲んでいたが、警備の兵士達はいつも黒パンにスープだ。ここでも階級的な差別がはっきりと現れて

いるのだった。

### 特産物「綿花」

ここウズベック地方は綿花の産地である。至る所綿畑だ。ソ連の綿花総生産量は約三五〇〇万トンで、その大部分はウズベック共和国で生産すると言われている。綿花を綿にした場合の歩留りは三分の一程度であるから、全ソ連の収穫高は一二〇〇―一五〇〇万トンである。綿花の処理工場が数カ所にできているということだった。これらの工場で働く労働者たちには旅行の自由は認められていないのである。勤務している工場の許可を得ても半径四〇キロ以上の所に行くことができない。この旅行を許可制にしているのは、労働意欲を募らせるための手段とも言える。

### ルーブル紙幣

月間ノルマ以上を働いた場合には報償として賃金が払われるのだが、捕虜になってから一度も誰ももらっていないかった。アクチーブが集まって所長に陳情した結果、漸くにして出してくれたが、それも彼等が何十％かをピンハネした残りわずかで、多い者で三ルー

ブル（内地換算約四五〇円）を申しわけのくれた。それでも私達の嗜好を少しでも満たすことができた。好きな煙草やパンや砂糖等を交換した。コルホーズに働く人々の多くは月大体五〇ルーブル（七千円）位の収入だ。

### コルホーズ（集団農場）の使役

ソ連には、コルホーズと、ソフホーズ（国营農場、農民は完全な賃金労働者である）とがある。私達十四、五人が作業衣のまま飯盒、水筒、毛布等を持ってラーゲルを離れ、約三十キロトラックに乗せられて行った。目的は、馬鈴薯の貨車積込み作業に従事するためだ。ソ連では直属命令者とその命令を受けた者以外は何ら関知せず、兵士でも将校でも自分の直属以外は横の連絡は全くないので全然関係なしだ。警備兵は私達の警備だけでその他は何があってもノーコメントだし、トラックの運転手は命ぜられるがまさに車を走らせていればよいのだ。ほどなく田舎のただっ広い貨物駅に降ろされ、そこで寝泊まりすることになった。何両かの貨車に馬鈴薯を積み込むのだが、二十貫入り

の袋は二人でも相当な苦勞をしながらの作業となつた。私達より一足先に使役に来ていたドイツ人捕虜は一人で軽々と提げていた。私達を見兼ねてか時々手伝ってくれた。夜はドイツ人捕虜と一緒に寝た。彼等はソ連人よりもっと太っていて大きかった。彼等は「我々は今は帰る国はないが、あと十年もすれば大ドイツ帝国を以前のように作り上げるんだ、ソ連人なんかに負けてたまるもんか」と大いに氣焰をあげていた。

約二週間、毎日主食は馬鈴薯だった、初めはちょっと珍しいので煮たり焼いたりして食べたが、それにも飽きてくるとどうにも仕方がなかった。無性に黒パンが恋しくなってくる、全く勝手なものだ。ドイツ人はさすがに彼等の主食であるので慣れた手付きで色々と料理をしていた。四、五日もたつと、甚だびろうな話だが糞の色が白くなってきたのは驚いた。これでは肥料にもならないだろうと話合つたものだった。

今度は、駅近くのコルホーズに行つて馬鈴薯の袋詰めをすることになった。畑に出て見ると山のようにう

ず高く収穫した馬鈴薯やニンジンやキャベツを積んで、莖や葉で蔽つてあつた。もう十月も下旬で霜が降りてその葉が真黒くなつていた。ソ連の将校が何やら交渉に来て、その山からニンジンを抜き取り、軍服で土を落として生のままかじつていた。

一日の作業を終えトラックに袋入りの野菜を山のように積んで帰る途中、警備兵が一袋おろせと命じた。せつかく苦勞して積み込んだものを員数が足りなくなるのを心配していたが、そこはうまくできたもので、なれ合いと言うのだろう、後で分かつたが、彼等はこの袋入りの野菜と一夜の妻とを交換してきたのである。土地娘であろうか、私達が見ても平気だ。目の前でキッスをしたり、天幕で蔽つて警備兵と運転手と職員が交代で可愛がつっていた。ここでも革命に敗れた哀れな民族の意識の低さと、動物と何ら変わらない彼等の行為を侮蔑の眼差しで眺めやつたのであつた。

首都タシケントとウズベック人

タシケントとは、トルコ系の言葉で「石の城」という意味だと言う。住民の大部分はウズベック人で、他

にタジック人、ロシア人、カザフ人、キルギス人等が住んでいる。このウズベック人は私達と同じ黄色人種でトルコ系だ、タジック人はインド系であつて、一九一七年十月十七日、ロシア革命の際一日にして敗れた国で、大部分は文盲である。革命前には賤民扱いされていたとか。

コルホーズの作業も終わり、二週間ぶりの帰途は、ここタシケントの街で車を止め、彼等は私達を車に残して適当にウォッカ（ソ連でつくる強烈な酒）でも飲みに行つたのだろうか。

平野の中に森に囲まれて街路樹が整然と立ち並びうっそうと繁つていた。鉄筋の高層建物がこれも整然と建っている。馬車や自動車、珍しい二階建のトリীবাসが走っていた。この街は中央アジア最大で、人口約六十万人といいことだった（現在百万人）。

昼の街は、公営市場（バザール）に行く老婦人であるるか、ゆっくりと買物籠を提げて私達をうさん臭そうに眺めながら通つて行つた。割合に静かだった。ここでの気温は年間平均約十三度で、和歌山市に比べる

と約二度程度の低さだ。冬は寒いかわりに夏はまた暑いのだ。雨も少なく、和歌山の約四分の一しか降らないので常に乾燥している。

ウズベックの婦人は、平安朝時代の公卿達が着たようなベラベラした着物をまとい、ほとんどが黒っぽい色で、頭から腰の辺りまでベール（幅約五十センチ、すだれ様なもの）を垂らして歩いている。目の前だけは少し粗くなっている。実にやっかいな、見ていていかに暑苦しい感じたが、外出の際、婦人は自分の夫以外の者には決して顔を見せてはならないことになっており、殊に結婚前の女子は特に嚴重である。足には女子供といえども長靴（皮革製）を履いている。これは大事なものらしく、雨でも降つてこようなものなら早速脱いで籠に入れ、裸足で平気で歩いている。裸足と言え私達も同様だ。作業の往復はつかげ下駄を履いているが、仕事にかかると裸足である。随分と足の裏が厚くなつてきたことと思う。

ウズベックの男子は、大きな襦袢どてらのようなものを端々に刺しゅうして紐で縛つて羽織り、頭には綺麗に

刺しゅうしたお碗型の帽子を冠り、足はもちろん裸足だ。ちょっと見るとだらしない格好だ。

家は大抵土に穴を掘って住んでいる穴居生活である。穴の上には葦の茎葉等を並べ、その上を土で覆っている。たまには地上より少し高い目に屋根を乗せている家もある。これらは夏涼しく、冬暖かいように設計された農民達の智慧である。夏がくると、実に味のない日本のよりも数段甘いメロンマクワが収穫できる。私達は靴下等と交換して食べたが、何とも甘ったるい匂いとおいしい味で、舌に乗せるととろけそうだ。試みにこの種子を蒔いてみようかと取っておいたが、いつの間にか置き場所を忘れてしまった。

### 休養

毎日、相変わらず続く重労働で疲労が目立ってきたようだ。青年突撃隊での無理が今頃出てきたのだろうか。定期診断の結果、よく働いてくれたから暫く休ませよという命令が出た。ラーゲル全体で早や二十人ばかり作業成績優秀で疲れた者が休養室に入っていた。

休養室では毎日女医の健康診断が行われ、食事も特別

上等だ。と言っても粟の代わりに米かお粥で、パンはちょっと白い位と砂糖の量はいつもの倍増であった。

最もありがたいのは自由な時間があることだった。一部の者だけがこうした待遇を得ても、同胞が生身をすり減らして働いてくれていることを思うと実にもったいないことだ。私達はこの休養を利用して、皆のために、また自分のためにと近くの丘へ出て土亀を捕らえに行った。栄養源を補給するために、気持ちよさそうに甲羅を干しているのをドラム缶にいっぱい生け捕るとともに、その卵も缶いっぱい拾い、夕食の膳をいささか賑わしたのだった。土亀は大抵頭と足をバラバラにしてスープに入れる。目をむいた頭や長い曲がった爪の足が出て来ても誰も気にはしない。黒と茶のまだら模様の甲羅で、器用な者は煙草入れやバックル、カフス等まで作って現地人にマホルカ（煙草）やピロシキと交換したりしていた。

### 発電所工事

ダム工事が着々と進んで底には石畳を敷きセメントで護岸を始めていた頃、今度はタービン（回羽式）の原

動機)を備えた水の落下地点の発電所を作る方に回された。硬質レンガを使って地下室と地上二階建てで外郭がほとんどでき上がり、内部の壁塗りから取り掛かった。落差百メートルもあつただろうか。暗い室内で裸電球の光を頼りにモルタル塗りだ。作業が終わり近くに近づくとも監督が来て長い物差しで検査だ。壁に物差しを直角に当てて横から照らすのでどうしても小さな隙ができる。この隙が多いと全部塗り替えしなければならぬのでノルマは半分しかくれない。翌日、固まった上にモルタルを塗るとだんだん壁が厚くなってくるが、それでも真っ直ぐでさえあればよいのだつた。

### ソ連雑感

こうした毎日を過ごしながら、夜はアクチーブとして革命史やソ連憲法を勉強した。そして皆の思想的な方向や、少しでもソ連の内情を知ってもらうため、壁新聞を週一回ずつ貼り替えていった。

私が読んで記憶している中では、その昔、帝政時代にはロシアの地主は農奴を持っていて牛馬と同じよう

に売買したり借金の代価に農奴をもって支払つたとか、また地主は皇帝から土地をもらい農奴までもらつた、また農奴の娘の初夜権を地主が持つていた等々ということは、ここへ来て読んだ本の中には一つも出てはこなかった。

また、スターリンはその論文の中で「農民のプチブル(中産階級)的な意識はこれを完全に清算するのに一世紀を要する、そうした意識は隔世遺伝する」と書いている。ソ連は、革命後三十年(昭和二十二年)になる。しかし資本主義の残滓(犯罪)は根絶していなかった。

ナチャーニツクは「社会主義社会が百年も続けば完全に共産主義となる。ソ連は今その道を通つて直ぐに進んでいるのだ」と威張っていたが、その社会主義の国には泥棒もこじきもおり、農場や工場には勲章がウヨウヨしている。重労働で囚人と我々捕虜を酷使し、ナチャーニツクは搾取とうそだけで生きているのだ。それから十五年を経た今日、いかに変化しているかは計り難い。

新聞は政府が発行する「イズベスチャ」と共産党本部が発行する「ブラウダ」があり時々見たが、大きな見出しくらいしか読めなかった。捕虜生活二年半ともなれば、その捕虜ぶりが板について段々要領が分かってくる。

ソ連は、十五の共和国から成立しているが、これほどとも日本の府県のようなものではなく、一応独立の形をとって、特に相互に密接なつながりを持っているものもあるが、近接の共和国が強く結びつくことはモスクワが民族政策の上から喜ばないのだ。互いに特産物を交換したりしているが、この種の物交的貿易は認められているのである。

ラーゲルを後に

ある日、作業から帰ると突然集合がかかった。約六百、二日分の糧秣を渡された。いよいよ今度は遠くへ移動だ。いや、警備兵が「ダモイ東京 マダムキッス」と言っていたので今度こそ真正銘帰れるぞ等等、思い思いの感情を湧かした。暗くなって出発、もらいたての黒パンをちぎっては口に放り込んでいた。

田舎の名も知らぬ駅の引込線で夜露に湿っぽい身体を毛布にくるんで待った。

多少ソ連の将校とも話した経験のある私はこの列車の責任者ということになった。どうも今までと様子が違う。もしかすると本当にこのまま帰してくれるかもしれないと心ひそかに思っていた。列車が走り出したのは、早や陽も高く昇ってからだ。この日、昭和二十三年六月十四日、実に嬉しく記念すべき日になろうとは……。また、いつの日か来ることがあるだろうか、ウズベックの地をいとも簡単に離れ去ったのだった。

車中の喜び

タシケントを過ぎると車窓から時々リングゴ畑が見える。二年前に通ったのと同じ所を今は逆に私達は胸弾ませて一路北上、中央アジアの平原を突っ走ってノボシビルスクに着いた。ここで往路と同じく公営浴場に、それこそソ連の垢を落とすべく入浴した。

この頃からソ連人が書いた小説や革命史や、日本における穢多について読まされた。どれも日本語に訳したものだ。二日もすると今度は七十冊の種々の本を各



貨車に配り、皆に読ますとともに共産党をよく理解して日本へ帰ったら宣伝せよとの命令だ。

それからが大変だった。この指揮官の言葉で今度こそ本当に帰してくれることが分かったので、各車両とも万雷の歓声を挙げた。彼らは何事が起こったのかと急に不機嫌になり、直ちに扉を閉めさせたのだった。

ハバロフスクの明暗

ハバロフスクに到着した。下車を禁止され、車内巡視がある。ソ連の将校たちが質問するのに答えるのだが、共産党について好感を持っているとか共産党万歳と言わないと、ここで列車から降ろされたタワリシー（同志）が多数いるんだと言って脅かされたが、これは本当だったかもしれない。

駅構内で使役に来ていた同胞は「君達が帰ったら一日も早く残留の私達を帰してもらえよう政府に頼んでくれ」と案外元気で握手を求めに来た。しかしその声は無気力で希望のないように思え、ただ涙をのんで固い固い握手をして別れたのだった。そこには無情にシベリアの涼しい風が頬を撫せて行った。

#### 帰国準備

無事巡視も終わり、ナホトカ港までの九〇〇キロをウスリー江に沿って南へ南へと列車は走る。実にベカバードのラーゲルを発つてからここまで二十四日間を要し、七月七日ナホトカに到着したのだった。この二十四日間は本当に短く感じられた。ナホトカ港は遠浅でウラジオストクの東に当たる小さな港で不凍港である。ここでも先着の同僚達がなんと二万人、皆帰りの船を待っているのだ。

このラーゲルに入ってまず感じたことは、生きていくということだった。今まで転々としたラーゲルに比べてなんと皆の顔が明るく生き生きとしていることだ。もうここまで来ればいつでも帰れるんだという安心感からか、何を言っても、また何をしてもう意気合って笑いが渦巻いていた。終戦この方久しくなかった心からの笑いが皆の顔に現れている。環境によってこんなにも変わるものだろうか。

兵舎が収容所と変わり、部隊対抗野球大会や演芸大会等で過ごすこと十有二日間、その間に身体検査や所

持品を嚴重に何回も検査して、金品は全部没収されループルともお別れだ。便所は吹きさらしの海中に南洋土人達の住家のように造られ、四六時中垂れ流しだ。

この海岸で再三乗船訓練があつたが、その都度自分達の順番が待ち遠しかった。

#### 去り行くソ連

七月十九日、いよいよソ連領とも別れの日がやって来た。過ぎにし幾多の苦難の道もいつしか薄らいで、帰還船「英彦丸」に乗船、去り行くソ連の山々を眺めやる時、背筋に寒いものがスッと走った。幾百の感情を乗せて走る船、私と一緒に捕虜となつた者のうち幾人がこうして帰れたであらうか。死の苦しみの中で作業を続けている同胞や若くしてまた年老いてこの異国の土と化した幾多の精霊の胸裏いかにばかりであつたらうかと思ふとき、太平洋戦争で多くの戦没者を出し空襲で命を失つた方達、我々捕虜もまた戦争の犠牲者である。こうした犠牲者を出さないためにも戦争をしてはならないのだ。日本国憲法では戦争を放棄してい

る。また日本の今日の繁栄の陰には尊い犠牲者がいたことを忘れてはならない。そして平和な世界を作るべきだ。今も重労働の同胞達が微かに雲が靡いている山々の向こうには呼べば答えそうに私達を見送つてくれているのだと思ふとき、自然と涙が溢れ出た。

#### 船中で

船中では早くも白布に赤チンキで日の丸を作っている。久しかった銀シャリを食べさせてくれたときには嬉しさで思うように口が動かなかった。塩昆布、馬鈴薯に肉の煮付け、全てが日本の味だ。本当によかつた、これでもう本当に帰れるんだと初めてゆつたりとした気持ちになつたのだらうか、皆よく寝た、寝入り続けた。

三日後、七月二十二日早朝、舞鶴港が、いや日本の山々が見えて来た。オオとばかり皆抱き合つて、涙が頬をつたつて流れるのもかまわず暫くは感無量であつた。

#### 帰還第一歩

入江になつた舞鶴棧橋に船が着いた。あたかも凱旋

の雄姿のごとく喜び勇んでタラップを降り、多くの出迎えを受けて幟はためく中を宿舍へ。この歓喜、何にもたとえようもなし。早速検疫で身体、持物一切を消毒、ソ連の垢を、捕虜という永遠に消えない汚点を背負ってはいるが、一応ここで水に流すことができたと思うのは私一人だけだろうか。

事務手続きのため二十三、四日の二日間ここで世話になった。故里の今は亡き父より当時私の抑留生活を気づかって引揚援護局宛の便りが一通、嬉しかった。

この手紙を手にして思わず胸が詰まった。この文の末尾につけ加えて永遠に保存したいと思う。

切符と手当九五〇円が渡された、入ソ後失くして三年間不自由していた眼鏡を一個一五〇円で二つも買った。眼鏡をかけて一度に明るくなった世界、これが本当の私の住む日本の国だったのだと、今更ながら思いを新たにしたのであった。私は一応列車の代表として、ソ連の墓標や仕事の内容等アメリカ二世に詳細にわたって問われるがままに答えることができた。それは、私よりも詳しく先に帰還した者が語ってあったこ

とと、戦争に敗れたという結果は同じでもアメリカの捕虜ではなかったということであった。そこには背広姿の上品な紳士がいた。ソ連人とは比較にならなかった。

懐かしの故里へ

七月二十五日、それぞれ北に南に分かれて行った。

汽車に揺られながら、漠然と車窓の緑と白く輝く川や家並みを眺めながら、荒野と化したという大阪駅に着いた。その爆撃の激烈さを思い出させた。紀伊中之島駅には、勝美兄や従兄弟の勇兄、睦三兄と弟義定が迎えに来てくれた。和歌山線はちょうど五時頃のラッシュだ。車中の人々は私の姿の奇異なのに驚きと好奇心の目を向けていた。雑糞の古びたものを肩に毛布一枚、よれよれの戦闘帽、足にはソ連製の大きなドタ靴と、おまけに瘦せこけた身体をして列車の隅にいると、皆が捜しに来てくれた。多くは語らずに、ただ喜びで胸が詰まった。船戸駅に着くと哲夫兄や春雄夫婦や故里の人が多勢迎えに来てくれていた。九年前歩いた懐かしい道を我が家へ歩一歩近づいている。実に

実に長い歳月だった。村はずれの石取口で、出発の時と同じ変わりない場所に再び立ち帰国の挨拶をしたのだった。

### 肉親

私は生きて、本当に生きて帰って来たのだ。父母が涙とともに迎え入れてくれた。父と固く手を握り合って言葉なく胸が詰まり、母も両眼に涙をためてよく帰って来たと言ってくれた。やはり我が家はいい、自分を育んでくれたこの家こそ安住の地である。早速風呂に入り母が用意の着物に替えて、改めて祖先の霊に無事帰れた喜びを告げたのだった。その夜は私の疲れを癒やすため静かに寝かせてくれた。軟らかい布団をかぶると何となく温かい親のありがたさがわかるように、涙がとめどなく流れるのをどうすることもできなかったが、いつしか深い睡りに誘われていってしまった。

翌日は帰還祝いにといささかの小宴を催してくれた。親戚縁者、村人達が喜びの言葉を述べて、私の十年間歩み来たった道を語り歎談、時を忘れたのだった。

た。

その翌日、村役場へ挨拶に行った。兄が収入役だったので村長や一同に紹介してくれた。皆、長い間の労苦を労ってくれたのでした。村も随分と変わっていた。十年一昔と言うが、故郷を離れてみなければ痛切に感じまい。山の上の地蔵尊の一本松が、いつに変わらぬ緑を天に聳え立てていた。

人間宇宙船がこの四月にガガーリン中佐を乗せて人類初の宇宙飛行に成功したソ連が、またまた八月六日、チトフ中佐が一日一時間十八分も飛んだのだ。実にソ連というところは不可解なことが多いが、これらに成功させるためのあらゆる手段が講じられたことについて、改めて偉大なる社会主義の国を思い起こすのである。

昭和三十六年八月十五日 摺筆

あとがき

昭和二十三年七月帰国後、折りに触れて青春の思い出を忘れないうちにと書いておいた原稿が積もって、

昭和三十六年に完璧には程遠いが一応まとまったものができて、小冊子、満蒙編と抑留編の初版が曲がりなりにもできました。皆さんに読んでいただいた。絹岡先生、歴史的に御指摘いただき、ありがとうございますました。知人友人達が回し読みしている間に、貴重な体験だから製本にしてはと励まされたり、火災等に遭ったりして汚れ、装丁も一部壊れたのを機に整理し直す決心をしたのです。

写し終えたとき、ちょうど七十七歳になったので喜寿の記念にと思い切って製本することにしました。感慨もひとしおです。

御愛読いただければ幸甚です。

平成十一年八月十五日

### 【執筆者の紹介】

大正十二年二月十九日

和歌山県那賀郡丸栖村に

生まれる

昭和十五年

和歌山県立粉河中学校

卒業

昭和十九年

旧満州国官吏となり、龍江省公署及び牡丹江稅捐局に勤務

昭和二十年八月二十二日

現地応召、満州第三七五二部隊入隊

兵科甲幹陸軍伍長で新京第二陸軍病院入院中にソ連軍侵攻のため病院列車で南下

八月二十六日

平壤一中校舎の関東臨時兵站病院へ下車入院

ソ連軍により武装解除後移動する

三合里、柳亭里、威興港を経てソ連へ

昭和二十一年六月八日

ポシエツト港上陸 貨車

移動

七月十一日

グリーンチマザール収容所

(れんが造り)

昭和二十二年三月十五日

ウズベック共和国タシケ

ント二八八ベカバード取

容所（建築、発電所工

事）

昭和二十三年七月十九日

ナホトカ出帆

七月二十二日

舞鶴港上陸 復員

昭和二十四年二月七日

和歌山市役所へ就職

昭和五十一年七月五日

和歌山市自治功労章受賞

昭和五十三年十一月八日

出納室長

昭和五十四年九月三十日

市収入役職務代理者を

もって定年退職

公務四十年勤務する間に習練の書道歴が、県展知事賞、市民特選、日本書芸院師範、青潮書道会理事、和歌山文化協会副会長等と大成された。

現在は書芸塾を開設し後進を指導するとともに、日々研鑽を積む書家であられます。

（和歌山県 林 三子雄）

## 私の青春 二十世紀前半波乱人生

和歌山県 南 口 佐 一

私も平成十一（一九九九）年十一月で七十四歳となり、振り返って見れば長い歳月ですが、過ぎ去って見れば歳追うごとに早く感じ、一日、一週間、一カ月はあっという間に過ぎ去る。ボケないうちに青少年時代、二十世紀前半の国民生活、教育、家族構成、私生活の状態と体験を書きたい。二十世紀末と比較し裏表のごとく総てにおいて変わったと思えてなりません。日本も、社会、生活は世界のトップといます。

少年時代は、貧乏人の子だくさん、私の家庭も姉四人、中で長男、弟二人、妹二人の九人。両親合わせて十一人。貧しい小作農の長男として生まれ、家は八畳、三畳、三畳の三間で寝起きし、私は当時、弟妹はいらないと思った。どこか家庭も七、八人の子供達はいたのです。その姉弟達とたまに会い、子供の当時は